

自然の中へ

《 第 6 集 》

岸和田健老大学 歩こう会

「自然の中へ」第6集

目次

〈序文〉本生完成への営み 正井尚夫	2
例会記録 96回～119回	5
「健歩証」該当者	58
記録集計	60
会員有志〈随想〉	61

〈序 文〉

本生完成への営み

正井尚夫

現代社会の老人観は明らかにゆがんでいる。それを端的に表している言葉のひとつは「余生である。つまり老年を余った生。いわばおまけの年月として積極的な意味を認めていないのである。

人間の一生は終始、自己実現の道であり、限りなく成長し発達する過程である。その最終に位置する老年期というのは、自己自身を完成させる完熟期であって、それまでのどのプロセスよりも重大な本生中の本生であるといえる。にもかかわらず、これを「余生」として軽視するのは現代社会が人生哲学を欠いているからである。

いまひとつの言葉は「敬老」である。より長くメシを食っているというだけで尊敬に晒すとみるのは、旧軍隊で古兵を、江戸時代の牢獄で牢名主を威張らせたのと同じ発想ではないか。しかも「敬老」の本音は、老人を敬遠して社会の片隅に追いやることであって、つまるところは「軽老」に通じている。その意味で「敬老」は美しく装われた差別用語であると思ふ。

私が言いたいのは、若者であれ老人であれ男であれ女であれ、全く同じように一人の人間として扱い尊重せよということであって、「老いを敬え」

とは似て非なる主張である。



健老たちはきょうも山に登る。そこに山があるからではない。また単に自然に触れ足腰を鍛えるためだけでもない。

それはわが本生を完成させる壮巖な営みであり、仲間学ぶことによって新たな自己を発見し創造する行でもあるのだ。

〈学長〉

例会記録

第96回～第119回

96	葛城登山
97	滝畑ダム (榎尾山—天野山)
98	熊野古道 (藤白神社—下津)
99	高野町石道 (下古沢—九度山)
100	松尾寺
101	六十谷—孝子
102	神社参拝
103	水間寺
104	陶器山—天野山
105	竹内街道・二上山
106	包近の桃
107	神於山 (わらび狩)
108	犬鳴山
109	東海自然歩道 ① (箕面—忍頂寺)
110	永楽ダム
例会外	東海自然歩道 ② (忍頂寺—摂津峡)
111	暗越奈良街道
112	葛城登山
113	滝の池—稲倉池
例会外	東海自然歩道 ③ (摂津峡—善峰寺)
114	飯盛山 (淡輪—岬公園)
115	史跡巡り (岸和田市)
116	松尾寺 (納会)
117	神社参拝
118	鍋山
119	積川神社

第96回例会 昭和58年10月9日(日)
 天候・気温 雨時々曇 25°

- ◎ 行先 葛城登山 約11km
- ◎ 参加人員 28名
- ◎ コース 岸和田駅前 バス 牛滝山 —— カシ平 ——
 —— 三差路(旧道) —— 山頂 —— 塔原 バス 岸和田

○ 行程記録

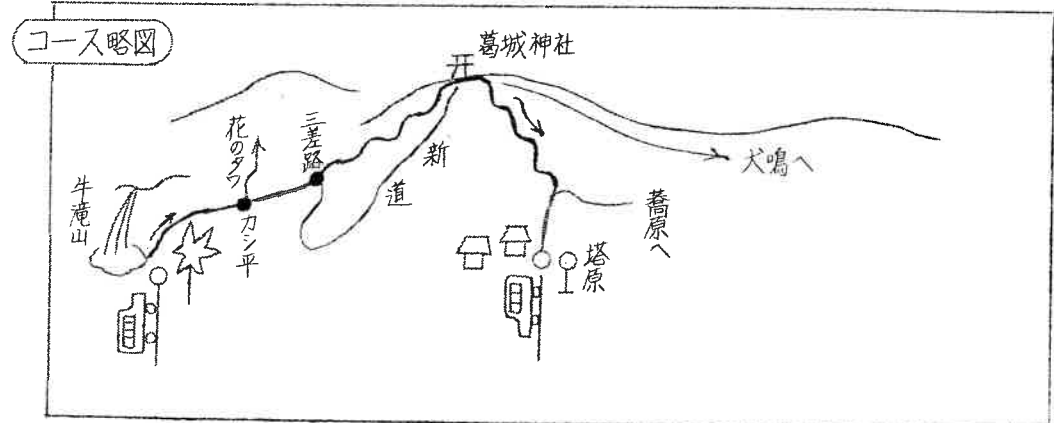
8.40 岸和田駅前	13.10 出発
9.35 牛滝山 10分間休憩	13.55 ビワ高原 10分間休憩
10.30 カシ平 15分間 "	14.35 塔原
10.55 三差路	14.50 バス発車
12.00 山頂(途中3分, 5分の休憩2回)	

記 事

年ノ回の葛城登山は雨中の決行となった。今にも降り出しそうな空模様、地車祭で賑う牛滝街道をバスは遠慮がちに。それでもたいした遅れもなく牛滝に到着。空をにらんで休憩もそこそこに出発、道中降ったり止んだり天気の方も忙しい。雨装束のままもうすっかり馴れた道を登る。頂上は瞬間的ではあるが50m先が見えにくくなる程の霧。紀州方面の眺めは望むべくもない。売店の軒をお借りして昼食。

出発前例によって長東さんに詩吟をお願いする。近く他のグループからも拍手が起こる。そして元気に塔原への道を下る。

- 参加者 金田、安浪、柏村、内田、西出、北口、永田、奥(源)、出水、村上、八野、八野(綾)、古林、久保、中野、水谷(-)、清水、信田、矢野、山舗、山本(覚)、奥(芳)、長東、諸節、尾崎、外3名



(諸節記)

第97回例会 昭和58年10月23日(日)
 天候・気温 曇一時晴 19°

- ◎ 行先 榎尾山 — 天野山 約11km
- ◎ 参加人員 23名
- ◎ コース 岸和田駅 — 泉大津駅 バス 榎尾山 — 滝畑ダム —
 サイクルスポーツセンター — 天野山 バス 泉大津駅

○ 行程記録

7.55 岸和田駅	12.05 サイクルスポーツセンター
8.15 泉大津駅発(バス)	12.35 天野山(昼食)
9.17 榎尾山 15分間休憩	13.51 バス発車
10.00 榎尾寺 20分間 "	14.12 国分前
11.10 滝畑ダム 10分間 "	(バス乗換発車)

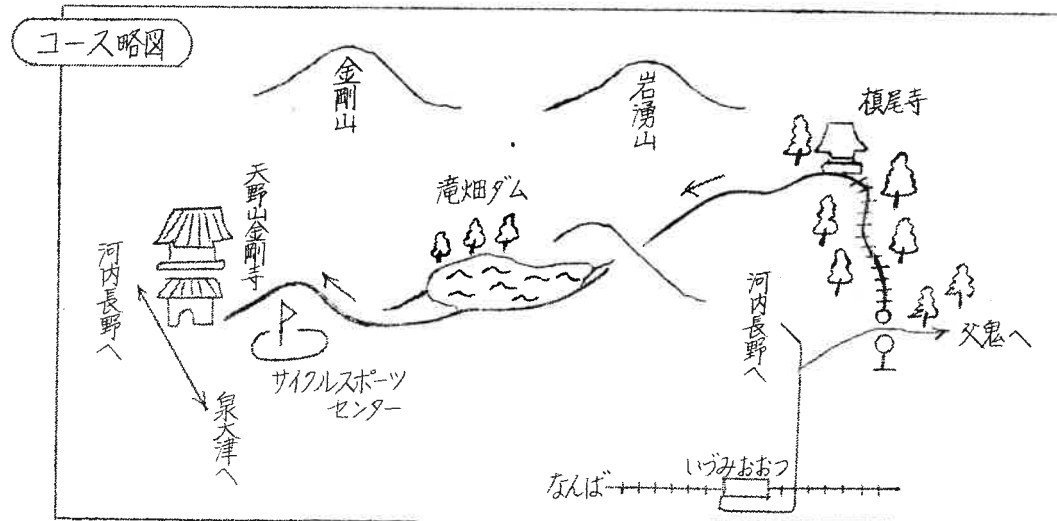
記 事

滝畑ダムは工事中であった前回(33回)とちがい、今は満々と水を湛えている。ダムの完成でこの周辺、ハイキングコースとして紹介される機会が多くなったようである。

サイクルスポーツセンターへと続く山の中復の道は坦々とした舗装された立派な道であるが、眼下に展開する景色を眺めながらの行進は楽しい。通る車のないのが有難い。

榎尾寺への登りをのぞけば楽なコースである。

- 参加者 金田、内田、西出、高島、出水、水谷(隆)、村上、八野、八野(綾)、古江、古林、小国、久保、中野、木下、高垣、信田、矢野、山本(寛)、北沢、長束、諸節、外1名



(諸節記)

第98回例会 昭和58年11月13日(日)

天候・気温 曇天 13°

◎ 行先 熊野古道 約12km

◎ 参加人員 24名

◎ コース 東岸和駅——海南駅——日限地蔵——藤白神社——
藤白峠——橋本——沓掛——拝の峠——長保寺——
下津駅

○ 行程記録

7.09 東岸和田駅	10.55 山路王子神社 10分間休憩
8.05 海南駅 10分間休憩	12.00 拝の峠 昼食40分
8.50 藤白神社 10分間〃	13.35 長保寺 25分間休憩
9.55 藤白峠 5分間〃	14.35 下津駅
10.40 橋本	14.47 発車
	15.50 東岸和田駅

記 事

又つの峠を越すのでしんどい「コース」の前評判で覚悟してきたむきもあったのか、拍子抜けのようであった。

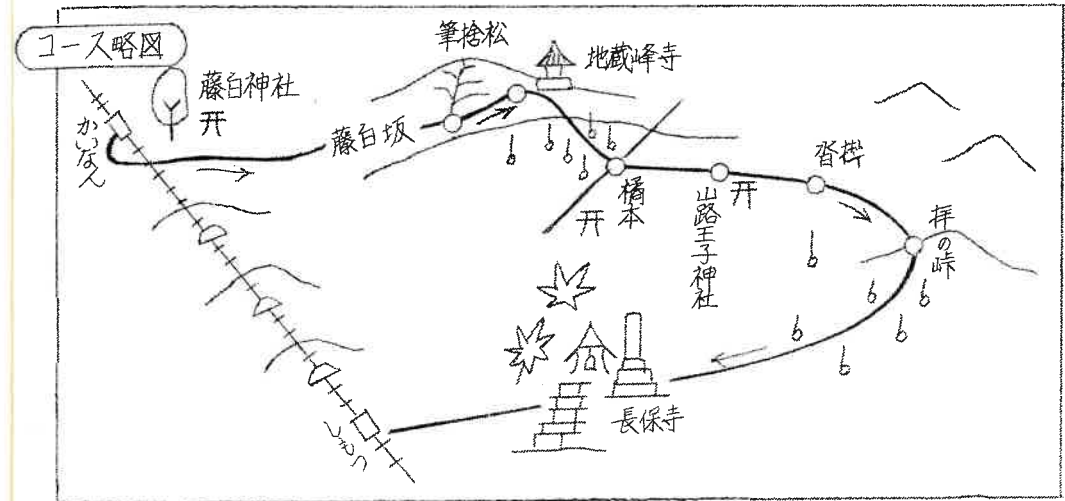
前回(60回)は拝の峠への道をやっとの思いで登ったものだが。矢張り気温のせいであろう。峠での昼食も吹き上げる風きつく、寒く、はやばやと出発。紀州徳川家の菩提寺・長保寺の紅葉を見物の後、下津駅に向かう。

岸和田に着いた時は予定より1時間も早かった。この日、木枯第1号との事。

「たづねきし藤白坂は草むして
有馬皇子の墓静かなり」

参加者

佐竹、金田、安浪、内田、西出、永田、奥(源)、出水、永谷(隆)、村上、八野、八野(綾)、久保、米沢、清水、高垣、山本(寛)、奥(芳)、山本(光)、諸節、尾崎、外3名



(諸節記)

第99回例会 昭和58年11月27日
 天候・気温 曇時々晴 6°

- ◎ 行先 高野町石道 約10km
- ◎ 参加人員 24名
- ◎ コース 岸和田駅——下古沢駅——笠取峠——慈尊院——
 ——真田庵——九度山駅——岸和田駅

○ 行程記録

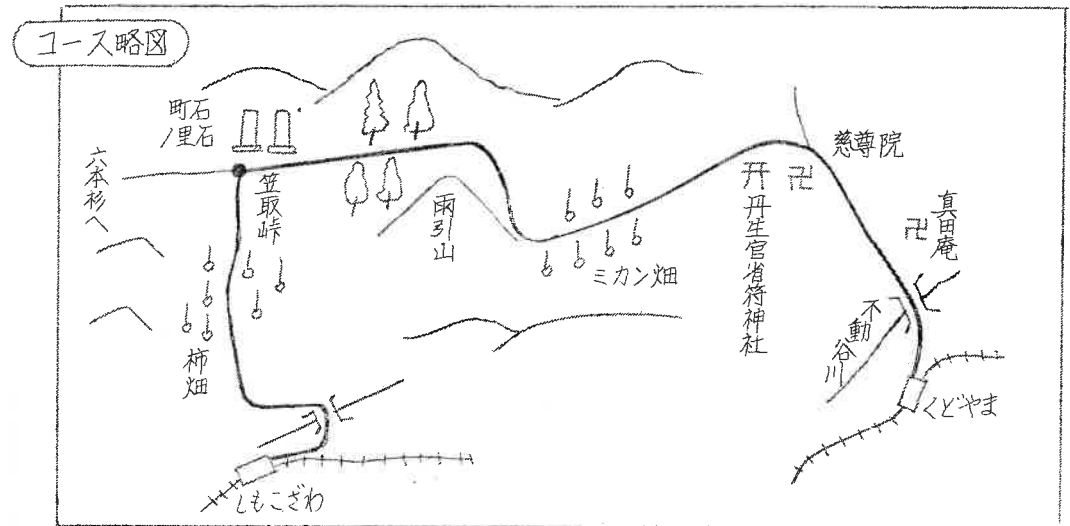
7.35 岸和田駅発		13.45 真田庵	15分間休憩
9.42 下古沢駅	10分間休憩	14.15 九度山駅	
11.10 笠取峠	10分間 "	14.34 発車	
12.00 ~ 12.40 昼食		16.30 岸和田駅	
13.10 慈尊院	15分間休憩		

記事

今回は柿の季節ということで一層楽しいものとなった。本来は九度山→下古沢が道順であろうが、楽な方をと考え逆コースを選んだ。それでも駅から笠取峠まではかなりきつい登りである。

144町石と1里石が並ぶ笠取峠からはもっぱら下り道。眼下に、蛇行する紀の川周辺の眺めは大きい。慈尊院ではご住職から九度山の名のいわれなど拝聴(孝心厚い大師が高野から月のうち9度もここにお住いの母を尋ねられた由)。寺の入口には大きなカゴに柿が一パイ。ふるまっているようだ。さすがに柿どころ。真田庵ではNHKテレビで徳川家康を放映中とあって熱心に見学、後、九度山駅へ。電車は空いていた。来年も来たいと皆さんの声。この日の冷え込み真冬なみ。

参加者 佐竹、金田、安浪、内田、西出、北口、中西、高島、出水、八野、八野(綾)、古林、小国、久保、中野、清水、矢野、奥(芳)、長束、山本(光)、諸節、乃村、外2名



(諸節記)

第100回例会 昭和58年12月11日(日)
 天候・気温 曇一時小雨 12°

- ◎ 行先 松尾寺 約9km
- ◎ 参加人員 41名
- ◎ コース 岸和田駅前 バス 福田 —— 北坂三差路 —— 稲葉
 —— 春木町 —— 松尾寺 —— 稲葉

○ 行程記録

8.05 岸和田駅前	10.50 松尾寺
8.25 福田	14.40 出発
9.10 北坂三差路 5分間休憩	15.20 稲葉
9.45 稲葉菅原神社 10分間休憩	

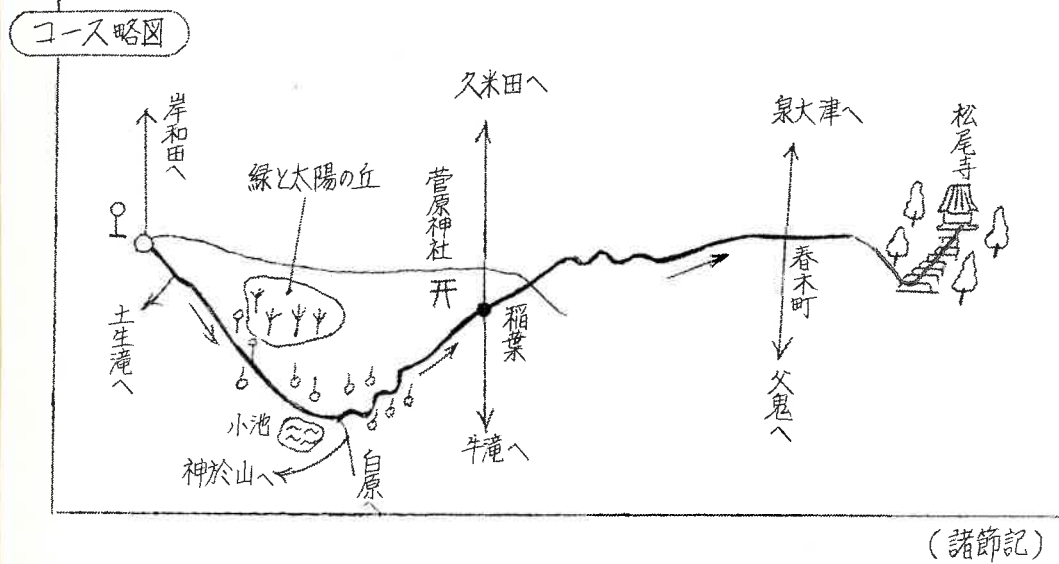
記 事

健老大学が53年6月創立。間もない8月4日、第1回を泉光寺へ歩いてから、今回が100回目である。

歩いた距離も1000kmを超えた。その一回、一回の例会の記録は、我等会員一同の貴重なる作品というべきであろう。記念の日を由緒ある松尾寺でお祝い出来るのはほんとうにうれしい。懇談会後、今や名物になっている釜飯をいただく。そして踊り、かくし芸の披露もあって大いにはずむ。当日100回記念の日本手拭い、「自然の中へ」第5集配布する。

参加者

佐竹、金田、安浪、内田、西出、北口、中西、永田、奥(源)、坂、高島、長野、水谷、村上、八野(綾)、吉田、吉田(正)、古江、古林、小国、水谷(静)、久保、中野、水谷(-)、米沢、木下、清水、高垣、信田、矢野、奥(芳)、北沢、坂根、長束、山本、山本(松)、諸節、尾崎、吉田(環)、熊岡、正井学長



第101回 例会 昭和58年12月25日(日)
 天候・気温 曇時々晴一時小雪 10~5°

- ◎ 行先 六十谷 — 孝子 約10km
- ◎ 参加人員 27名
- ◎ コース 東岸和田駅 — 六十谷駅 — 礼立山 — 逢帰ダム
 — 孝子観音 — 孝子駅

○ 行程記録

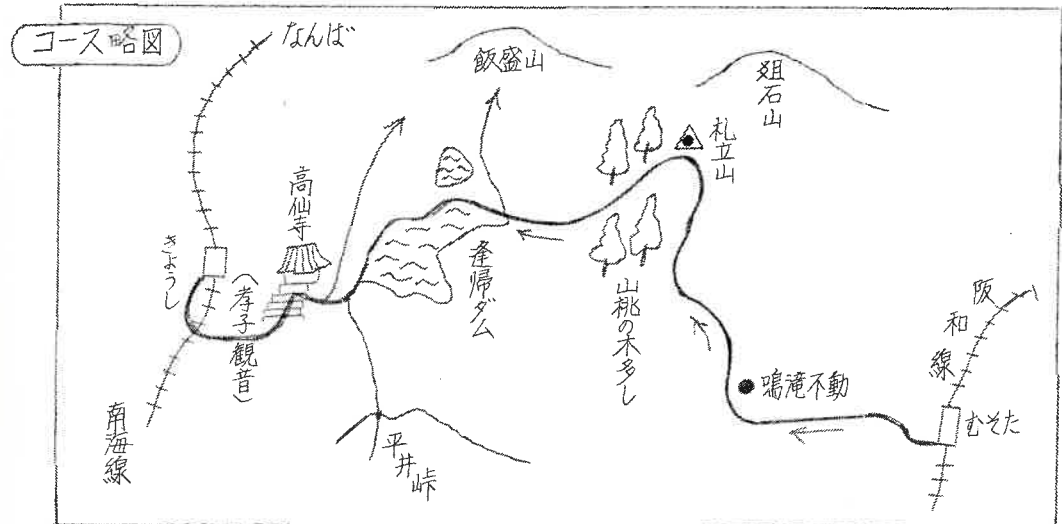
8.23 東岸和田駅	13.15 逢帰ダム 10分間休憩
9.10 六十谷駅	13.55 孝子観音 10分間 "
10.05 採石場前 10分間休憩	14.30 孝子駅
11.20 礼立山 昼食	14.52 発車
12.00 出発	

記 事

凍てついた駅への道を急ぎながら、この寒さでは参加者も少ないのではないかと気になったが、26名の参加は意外。

六十谷駅から山の登り口までの足の早かったこと。ところが礼立山への登り口が作業のため土砂の山が道をふさぎ、仕方なく迂回。藪の中をイバラと闘っての難行となった。後は眺めのいい山道、山頂▲ 349m三等三角点の標石付近で風をさけて昼食。ところがダムへの下りが道がまたとぎれ。とにかく入口と出口に苦勞した妙なコースであった。それでも駅で電車を待つひととき、今日の「コース」いまままで一番面白かったとの声あり。とにかく無事でよかった。目を落すと枕木にうっすら雪が。冷たいはずだ。

参加者 佐竹、金田、安浪、内田、西出、北口、中西、高島、八野、八野(綾)、古江、古林、小国、水谷(静)、久保、中野、水谷、清水、矢野、山本(寛)、奥(芳)、諸節、尾崎、乃村、長東、外2名



(諸節記)

第10回例会 昭和59年1月8日(日)
 天候・気温 曇一時雨後晴 5°

- ◎ 行先 神社参拝 (脇浜戎神社) 約8km
- ◎ 参加人員 34名
- ◎ コース センター前 —— 岸城神社 —— 岸和田海岸 —— 海岸沿
 —— 脇の浜戎神社 —— 願泉寺 —— 感田神社 ——
 —— センター前

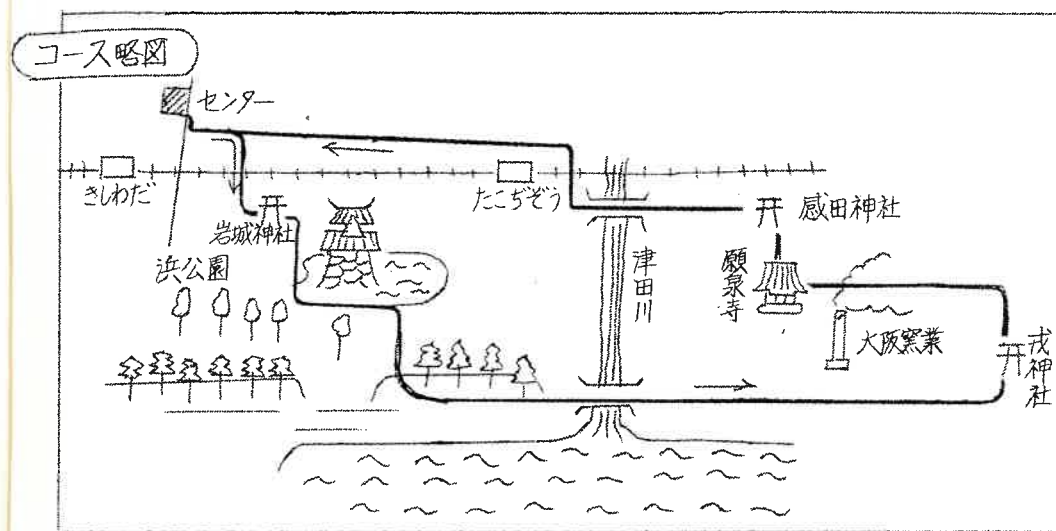
○ 行程記録

- 8.00 センター前
- 8.50 新津田川橋
- 9.35 脇の浜戎神社 20分間休憩
- 10.20 願泉寺 10分間休憩
- 10.35 感田神社 10分間休憩
- 11.20 センター前

記 事

寒風吹く海岸沿い「コース」を、今年も元気で歩きますとの願いをこめて巡拝する。

参加者 佐竹、金田、安浪、内田、西出、北口、中西、奥(源)、高島、村上、八野、八野(綾)、吉田、吉田(正)、古林、小国、水谷(静)、久保、矢野、水谷、高垣、山本(寛)、奥(芳)、坂根、太地、山本、山本(松)、諸節、尾崎、乃村、吉田(環)、北沢、外又名



(諸節記)

第103回 例会 昭和59年2月12日(日)
 天候・気温 曇後雪 4°

- ◎ 行先 水間寺 約8km
- ◎ 参加人員 32名
- ◎ コース センター前 —— 流木慰霊塔 —— 貝塚山荘 ——
 —— 城の坂 —— 釘熊堂 —— 水間寺

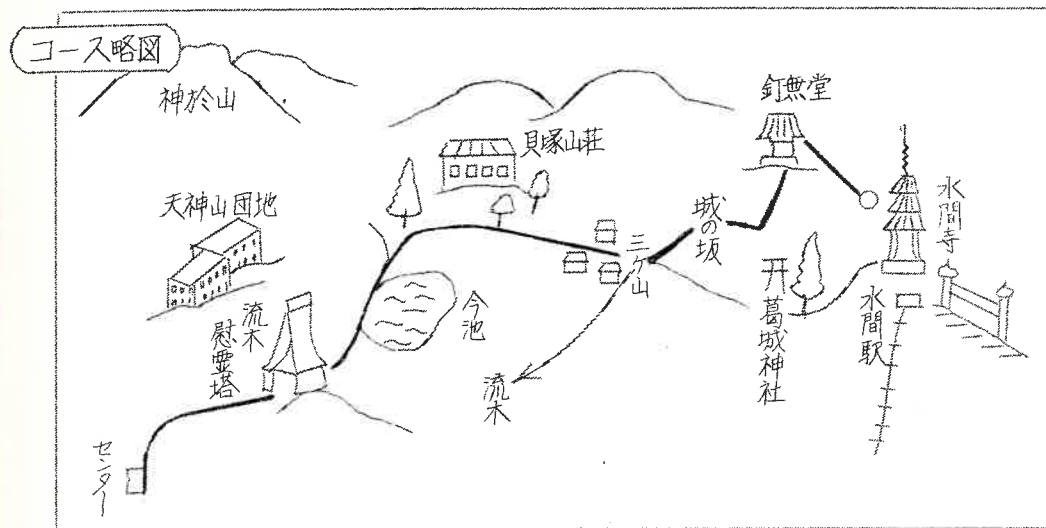
○ 行程記録

8.05 センター前
 9.00 流木慰霊塔 10分間休憩
 9.55 貝塚山荘 15分間休憩
 11.05 水間寺
 解散

記 事

特記事項なし。

参加者 佐竹、金田、安浪、内田、西出、中西、奥(源)、高島、出水、長野、
 水谷(隆)、村上、八野(綾)、吉田、吉田(正)、小国、古江、古林、
 久保、中野、水谷(-)、米沢、清水、高垣、坂根、山本(光)
 外6名



(久保記)

第104回例会 昭和59年3月1日(日)
 天候・気温 曇時々晴 0~7°

- ◎ 行先 河泉国境・陶器山—天野山 12.1km
- ◎ 参加人員 28名
- ◎ コース 岸和田駅—狭山遊園前—岩室—陶器山—
 —大野山—下里町—天野山—バス—泉大津

○ 行程記録

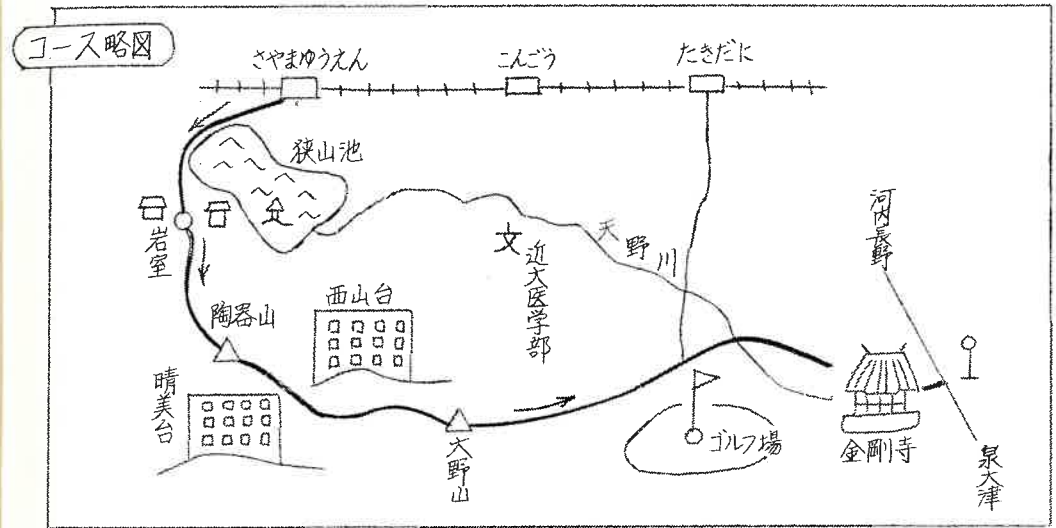
7.35 岸和田駅	12.25 天野山金剛寺
8.38 狭山遊園駅 10分間休憩	昼食
9.15 岩室	13.05 バス停
陶器山 10分間休憩	13.13 バス発車
10.30 第一鉄塔 10分間休憩	
11.40 下見町グラウンド	
10分間休憩	

記 事

コースの殆んどが河泉国境の明るい丘陵地帯である。池を渡って冷たい風が狭山池堤を歩く我等の集団に吹きつける。岩室からまもなく、丘の道を陶器山に登る。左に金剛山、岩湧山、前方に三國山、葛城山、右側に泉州一带と、広がるとうれしい眺めだ。真下の団地に住む人達にとっては絶好の散歩道であろう。

大野山から天野丘陵へと。眼下のゴルフ場では寒さもものかわ、サンデーゴルファーで賑わっていた。天野山で昼食、ゆっくりする予定も冷たい風にせかされ、記念の写真の後、早目のバスに乗る。バス停では粉雪が舞っていた。4、5月頃ぜひ出直したい。

参加者 佐竹、金田、安浪、西出、北口、中西、奥(源)、高島、田内、出水、
 長野、村上、八野、八野(綾)、吉田、吉田(正)、久保、中野、水谷(-)、
 木下、清水、信田、奥(芳)、太地、長束、阪森、諸節、外1名



(諸節記)

第105回例会 昭和59年3月25日(日)

天候・気温 曇後晴 12°

- ◎ 行先 竹内街道。二上山 約12km
- ◎ 参加人員 29名
- ◎ コース 岸和田駅—天下茶屋駅—阿倍野駅—当麻寺駅—当麻寺—竹内峠—二上山—叡福寺—上太子駅→

○ 行程記録

7.35 岸和田駅	13.15 雄岳 10分間休憩
9.20 当麻寺駅 10分間休憩	13.50 釣堀
9.45 当麻寺 15分間見学	14.35 叡福寺 30分間休憩
11.00 竹内峠 10分間休憩	15.55 上太子駅
12.00 雌岳 昼食 50分間	16.02 発車(古市行)

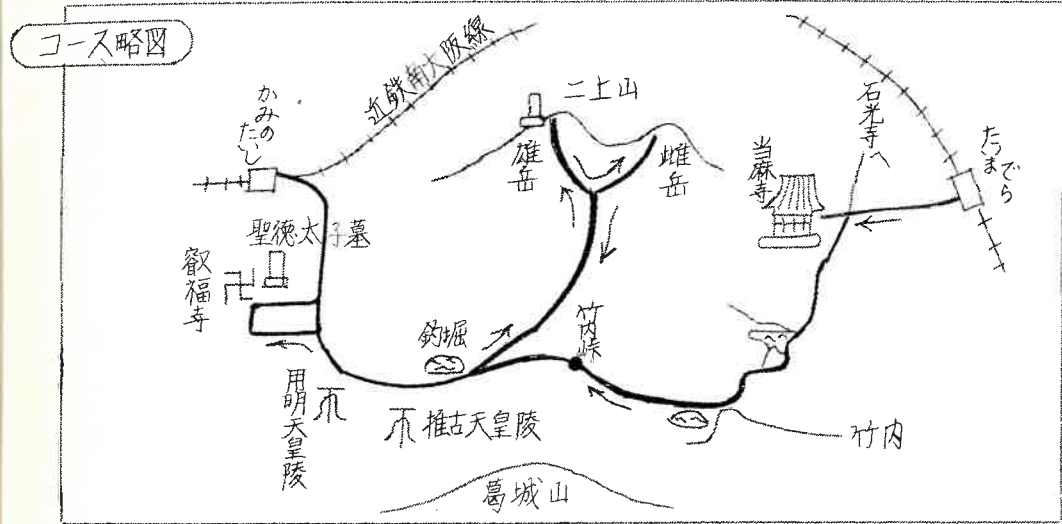
記 事

朝方天気が気になったが、当麻寺を出る頃から青空広がる。

「コース」はどのハイキングガイドブックにも紹介されている有名コース。道標も完備。初めてでも不安はない。二上山、雄岳 515m、雌岳 474m。山頂は小学低学年の少年達の集団で賑わっていた。悲運の天津皇子の墓に詣でる。眺めを楽しみながら雌岳で昼食。うねうねと大和川、Pランド、金剛山を背負った恰好の葛城山と、360°の展望が楽しめる。

竹内街道は大和と浪速を結ぶ古代の国道1号線、叡福寺への道では日本最初の女帝推古天皇を初めとする御陵・史蹟の案内が目につき、往時へのおもいをかきたたせる。参加者でこのコース初めての人も多く、皆さん満足の日。上太子駅で解散の挨拶。

参加者 佐竹、金田、安浪、内田、西出、北口、中西、永田、高島、出水、水谷(隆)、八野、八野(綾)、小国、古林、久保、中野、米沢、清水、高垣、山本(寛)、太地、山本(光)、松本、坂部、加治、諸節、外2名



(諸節記)

第106回例会 昭和59年4月8日(日)
 天候・気温 晴 14°

- ◎ 行先 包近の桃 約9km
- ◎ 参加人員 34名
- ◎ コース センター——久米田寺——岡山御坊跡——
 ——緑と太陽の丘——福田

○ 行程記録

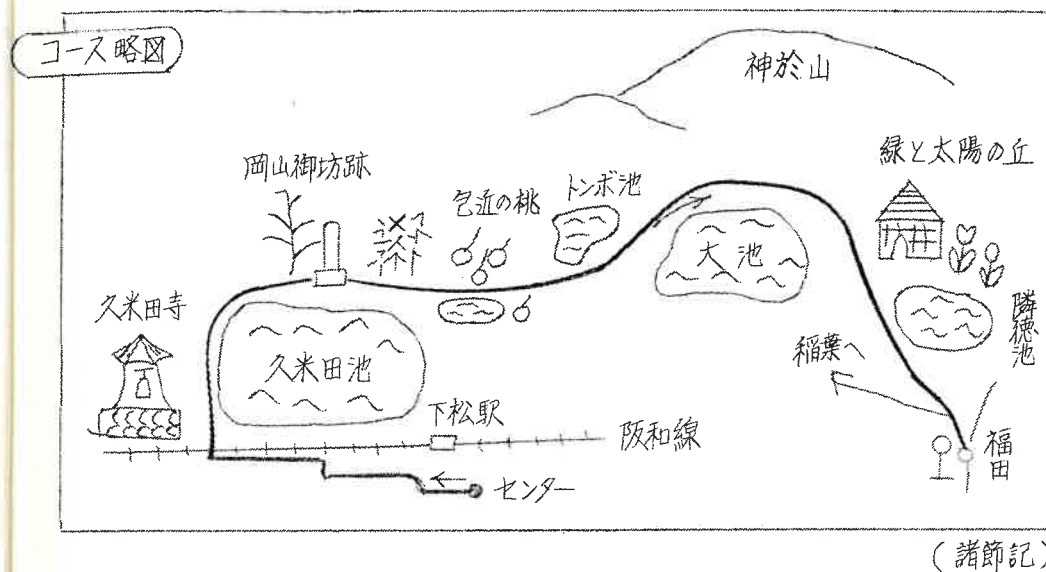
8.00	センター		13.00	出発
9.15	久米田寺	15分間休憩	13.20	福田
9.50	岡山御坊跡	10分間休憩	13.35	バス発車
	桃畑	10分間休憩		
11.00	緑と太陽の丘	昼食、座談会		

記 事

時間的に余裕があるので貝吹山古墳に登り、▲ 45.9m 三等三角点を見学。後、久米田寺に到る。今日はお釈迦さんの誕生の日とあって、年に一度のご開帳の日ということで、いい日に巡りあえた。おさがりや、甘茶の接待をいただく。

出発。池を吹き渡る風はまだ肌寒い。堤の桜はまだ全熟。桜前線が和歌山南部あたりで足踏で、春らん満はしばらくおあずけ。包近の桃も堅い蕾のまま。道中休憩を十分とって太陽の丘へでて、昼食後、座談会。そして福田バス停へ。

参加者 佐竹、金田、安浪、内田、西出、北口、中面、奥、高島、田内、出水、八野、八野(綾)、吉田、吉田(正)、小国、古江、久保、中野、木下、高垣、信田、矢野、北沢、奥(秀)、太地、山本、山本(松)、諸節、吉田(環)、外4名



(諸節記)

第107回例会 昭和59年4月22日(日)

天候・気温 曇 14°

- ◎ 行先 神於山 わらび狩 約17km
- ◎ 参加人員 30名
- ◎ コース センター——泉光寺——福田——緑と太陽の丘
——国見台下——国見台——宮の台 バス (岸)

○ 行程記録

8.00	センター		11.50	国見台 昼食
8.45	泉光寺	10分間休憩	12.50	出発
9.45	緑と太陽の丘	10分間休憩	13.35	宮の台バス停
10.20	国見の森入口	10分間休憩	13.43	バス発車
10.45	国見台下	45分間わらび狩		

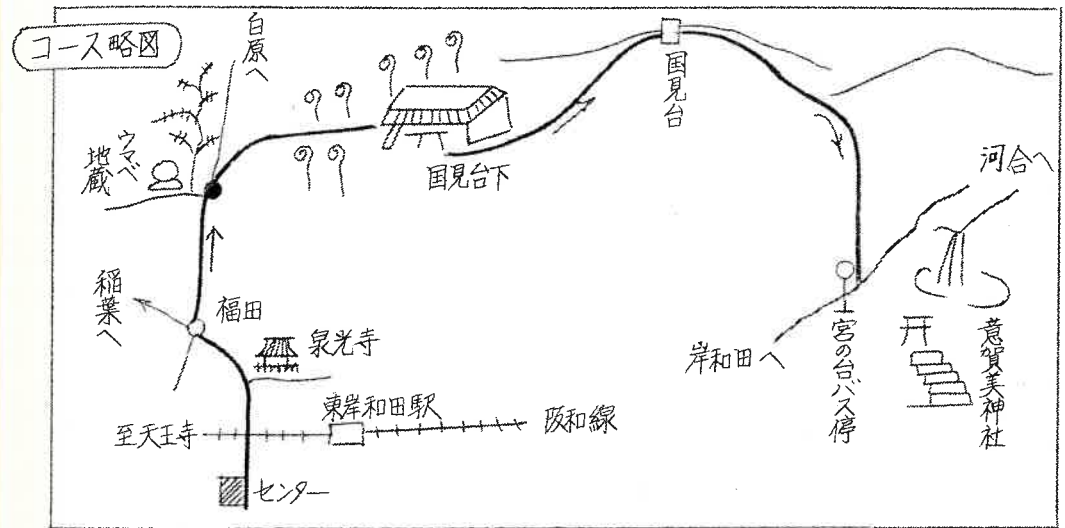
記 事

今にも降り出しそうな空模様。気になって06-177に電話する。降雨確率20%。それでも雨にならず幸いであった。

花冷えの天候続きということで、緑と太陽の丘ではツツジも蕾がいろいろいたばかり。去年の今頃とは大違い。

例年どおり国見台下の広場で大休止。ワラビ探りにおもしろい方向にちる。だが年々この時期、人も増え、見つけるのに苦労するようだ。それでも収穫を見せあってにぎやか。折から山仕事姿の市長さんとも挨拶をかわす。「コース」はもうすっかりなれた道。国見台で昼食の後、宮の台へ。

参加者 佐竹、内田、西出、北口、中西、加治、坂、出水、水谷(隆)、八野、八野(綾)、吉田、吉田(正)、古林、小国、久保、中野、米沢、高垣、信田、山本(寛)、太地、山本(光)、諸節、吉田、赤塚、大北、松本、外2名



(諸節記)

第108回例会 昭和59年5月13日(日)
 天候・気温 晴後曇 26°

- ◎ 行先 犬鳴山 約11km
- ◎ 参加人員 39名
- ◎ コース 泉佐野駅 バス 水呑地蔵 — 境界橋 — 八丁登 —
 — 峠 — 生草谷 — 犬鳴山 バス 泉佐野駅

○ 行程記録

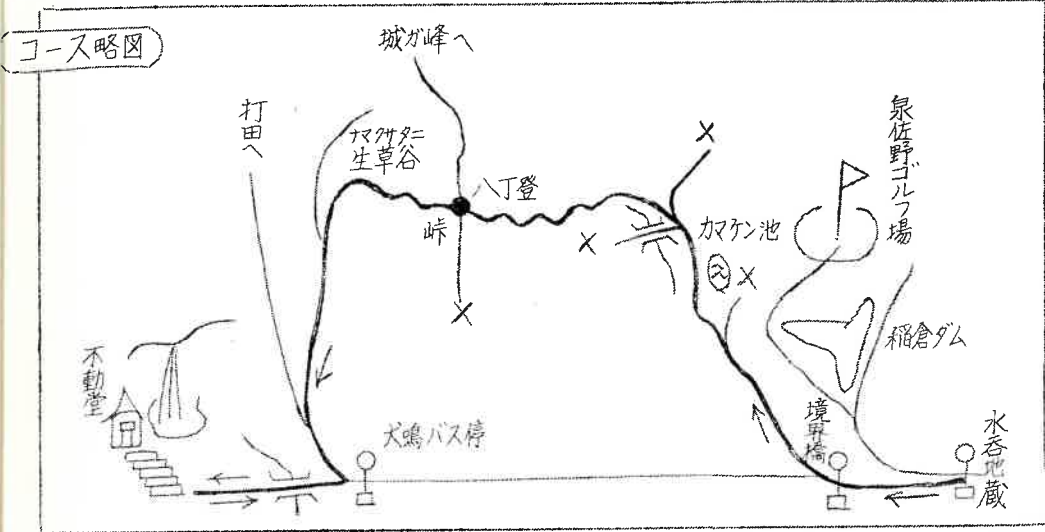
8.02 岸和田駅	10.40 峠 25分間休憩
8.30 泉佐野駅発	12.20 犬鳴山バス停
8.55 水呑地蔵	不動堂(昼食 80分間)
9.30 カマケン池 15分間休憩	15.15 犬鳴山バス停
八丁登り 途中5分間休憩2回	15.22 発車

記 事

八丁登りもようやく登りつめる頃、こんなえらいんやったら来るんやなかった、と後の方で一人言が。これには正直まいった。また一方でこんなが面白いんやという声も大きい。この「コース」老人達にとってやはり難「コース」と考えるべきであろう。境界橋で降りるのが正當であるが、一駅手前の水呑地蔵で下車、この間約500m。料金の節約もあって、境界橋から直ぐ右へ林道を1.5kmばかり入って、三差路を橋を渡らず右へ10m程歩いて、左へそれて細道に入る。そこが登り口である。特に要注意。峠に登ってから生草谷への道がまた迷い易い。地図も頼りになりにくい。やはり経験者と同行するのが無難。

新緑の犬鳴山は若い人達で大賑わい。祈禱所前で新会員を迎えて全員自己紹介。長束さんの詩吟を楽しんだ後バス停へ。

参加者 加治(栄)、川崎、赤塚、松本、十和、藤原、佐竹、金田、安浪、西出、北口、中西、加治、奥(源)、出水、水谷(隆)、村上、八野、八野(綾)、吉田、吉田(正)、小国、古林、水谷(静)、久保、水谷(-)、清水、高垣、信田、奥(芳)、北沢、長束、山本(光)、諸節、尾崎、吉田(環)、外3名



(諸節記)

第109回例会 昭和59年5月27日(日)
 気候・気温 曇 23°

- ◎ 行先 東海自然歩道(箕面—忍頂寺) 約19km
- ◎ 参加人員 25名
- ◎ コース 箕面駅——箕面滝——政の茶屋——開成皇子墓——
 ——北摂壘園——素盞鳴尊神社——忍頂寺——阪急茨木駅

○ 行程記録

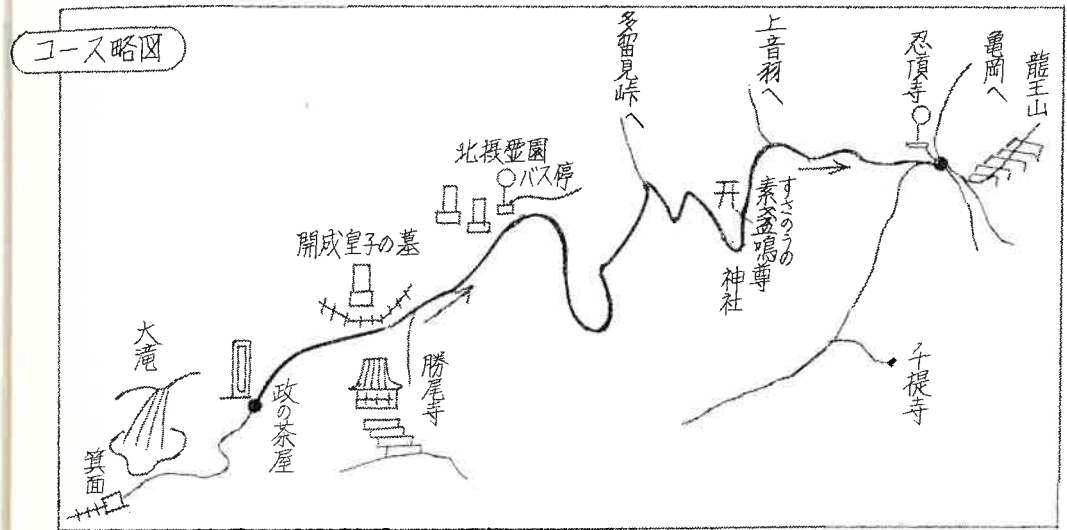
7.10 岸和田駅	13.30 北摂壘園 10分間休憩
8.45 箕面駅 10分間休憩	15.15 素盞鳴尊神社 10分間休憩
9.35 箕面滝 15分間休憩	途中 10分間休憩
10.25 政の茶屋 15分間休憩	16.35 忍頂寺
途中 10分間休憩	16.46 バス発車
17.20 開成皇子の墓 40分間(昼食)	17.50 茨木駅
	18.50 ナンバ

記 事

程よい条件であったのか、長過ぎる距離も楽しみながらの歩行となった。「コース」は天下のコース、政の茶屋に立つ石標は勢いのある書体で東海自然歩道と彫ってある。ここがスタート地点。記念の写真を撮る。

今日のコース全体を通じてさすがに起伏に富んだ、思い出に残る道である。東京高尾山まで1380kmは無理としても、三重県余野公園まで370kmは一緒にしたいものと思ふ。8名の方は北摂壘園よりバスで箕面へ。(バスの便多し)

参加者 阪森、佐竹、金田、安瀬、内田、北口、中西、永田、奥(源)、坂部、高島、田内、吉田、吉田(正)、久保、中野、木下、清水、山本(寛)、奥(芳)、諸節、尾崎、吉田(環)、外1名



(諸節記)

第110回例会 昭和59年6月24日(日)
 天候・気温 曇一時小雨 25°

- ◎ 行先 永楽ダム 約10km
- ◎ 参加人員 33名
- ◎ コース 水間駅——水間寺——鉅谷——永楽ダム——
 ——下高田——馬場——水間寺
- 行程記録

- 8.02 岸和田駅
- 8.40 水間寺 10分間休憩
- 9.45 遊女の墓 10分間休憩
- 10.50 永楽ダム 10分間休憩
- 12.30 水間寺 昼食後座談会
- 14.10 水間寺で解散

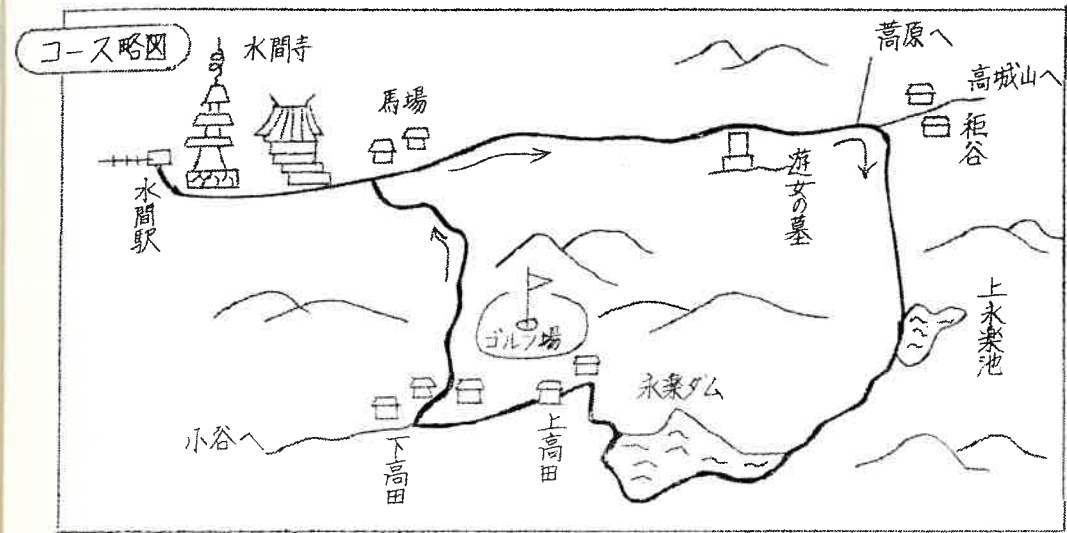
記事

従来、永楽ダム→小谷→水間のコースを歩いたが、平坦な舗装道路のため、今回は永楽ダム→下高田→馬場→水間への山間の道をとる。1人で歩くにはこわい道という声あり。それだけ味のあるコースというべきであろう。

雨のため予定をかえて水間寺で昼食。後、今後の会の運営について話しあう。

参加者

加地(求)、阪森、松本、藤原、佐竹、金田、安浪、加地(行)、内田、
 西出、中西、奥(源)、田内、出水、八野、八野(男)、古江、古林、
 水谷(静)、久保、中野、永谷、木下、清水、高垣、矢野、山本(寛)、
 北沢、山本(光)、奥(芳)、諸節、吉田、外1名



(諸節記)

例会外 東海自然道シリーズ 第2回 昭和59年7月23日(日)
 天候・気温 晴 31°

- ◎ 行先 忍頂寺 — 摂津峡 約12km
- ◎ 参加人員 23名
- ◎ コース 岸和田駅 — 阪急茨木駅 ^{バス} 忍頂寺 — 龍王山 — 車作 — 萩谷 — 摂津峡 — 上のロバス停 — 高槻駅(国鉄)

○ 行程記録

7.10 岸和田駅	11.55 車作 昼食/時間
8.20 茨木駅	14.10 萩谷 20分間休憩
9.35 忍頂寺	15.35 摂津峡白滝茶屋 15分間休憩
10.10 龍王山宝池寺 10分間休憩	16.15 上のロバス停
10.27 龍王山 10分間休憩	16.27 バス発車
11.00 岩屋 10分間休憩	16.55 高槻駅着

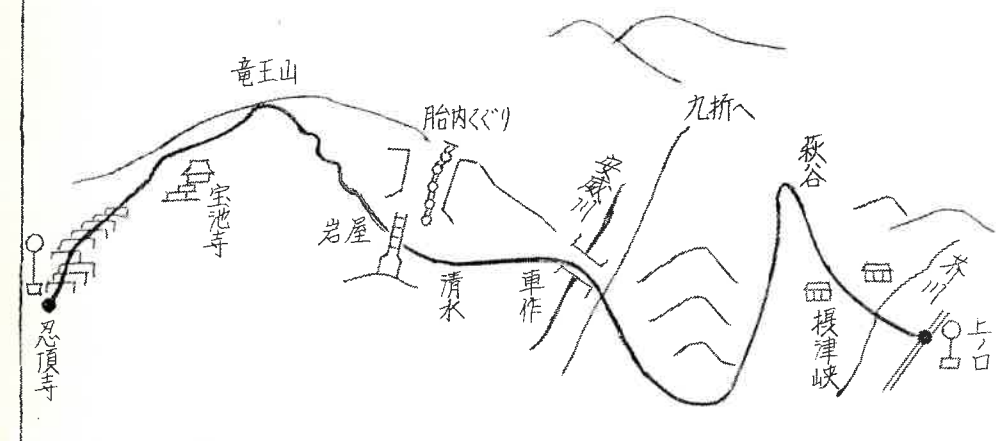
記 事

忍頂寺でバスを降り、スタート地点、龍王山の石段に一同腰を下ろして記念の写真。本社まで8丁の石標も写る。八大竜王を祀る宝池寺で休憩。お茶の接待をいただく。▲ 510m山頂は直ぐそこ。ここから清水(きよみづ)へは茨木自然歩道をとる。途中岩屋の不動岩前で休憩。この胎内くぐりは、あぶないと考え遠慮してもらう。

車作から萩谷までは一般向の舗装の林道をゆく。蔭少なく、暑く、長い道、景色も目に入らない。しかし萩谷から摂津峡へは里人の仕事道ということだが、歩くのが楽しくなる道。摂津峡では家族連の姿が目立ち、子供達が流れを楽しんでいた。白滝茶屋付近で休憩後、上のロバス停へ。

参加者 大北、阪森、松本、佐竹、金田、安浪、内田、西出、中面、出水、村上、小国、古林、水谷(静)、久保、中野、水谷(-)、清水、高垣、矢野、北沢、諸節、尾崎

コース略図



(諸節記)

第111回例会 昭和59年9月23日(日)

天候・気温 晴 28°

- ◎ 行先 暗越奈良街道 9km
- ◎ 参加人員 29名
- ◎ コース 岸和田駅—ナンバ(近鉄)—南生駒—暗峠—
大阪府民の森なるかわ園地—神感寺(昼食)—枚岡神社(解散)

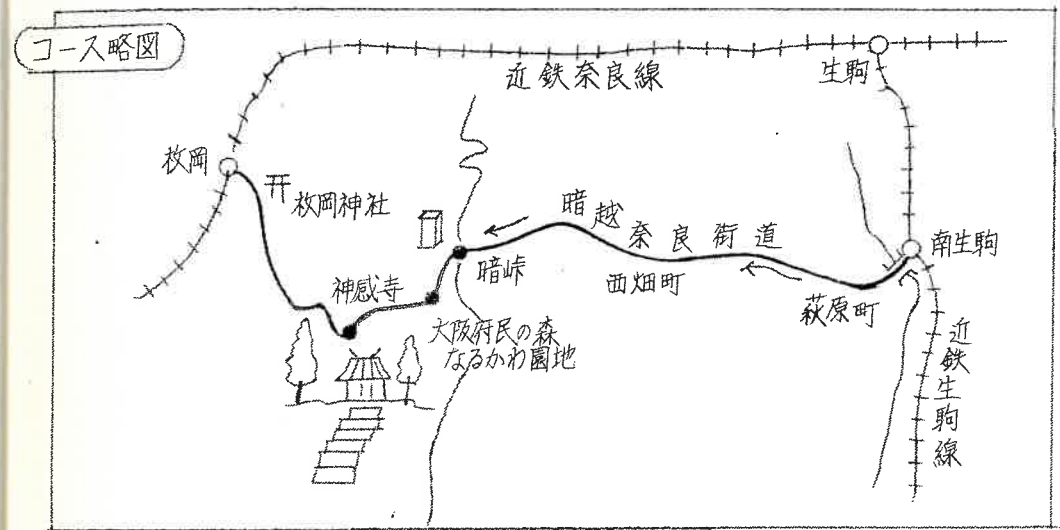
○ 行程記録

7.35 岸和田駅	10.10 西畑町 休憩10分間
8.24 近鉄ナンバ駅	10.45 暗峠 休憩10分間
9.00 南生駒着	11.30 大阪府民の森なるかわ園地
9.10 出発	11.45 神感寺 昼食、1時間
9.37 萩原町 休憩10分間	13.30 管理事務所 休憩15分間
	14.30 枚岡神社

記 事

3カ月ぶりの例会は秋晴のよい天気。29名の参加者は久しぶりの山歩きでなかなか意気旺人である。下見で気になった信貴電乗継は一電車早くナンバを出て難なくパス。南生駒駅を出て橋を渡るとだらだらの登り。道は舗装されているが、暗峠まできつい坂がつづく。「30分歩いたら休め」今日の鉄則を守り暗峠を目指す。折から彼岸の中日で神感寺参拝のタフシーが何台も登って来る。道幅が狭いのでかわすのに気をつかう。暗峠に予定通り到着、昼食場所の神感寺へ向かう。途中、府民の森なるかわ園地までまだ登りがつづく。そこから待望の下り道。昼食は境内広場で思い思いのスタイルで、これが歩こう会の一番楽しい時だと誰かが言ったことを思い出す。枚岡神社までは腹ごなしに恰好の道のりだ。下りは皆さん早い。久しぶりに長束さんの詩吟を聞いて解散。

参加者 赤塚、大北、坂森、十和、松本(元)、佐竹、金田、安浪、内田、西出、北口、中西、坂部、瀬川、高島、田内、水谷(隆)、村上、八野(綾)、八野(開)、古林、大居、水谷(-)、木下、高垣、山本(寛)、長束、尾崎、吉田



(金田記)

第11回例会 昭和59年10月14日(日)
 天候: 気温 晴 23°

- ◎ 行先 葛城登山 約11km
- ◎ 参加人員 29名
- ◎ コース 岸和田駅前 バス 牛滝山 —— カシ平 —— 三差路 ——
 —— 旧道 —— 山頂 —— 塔原 バス 岸和田

○ 行程記録

8.40 岸和田駅前	11.45 頂上 昼食
9.30 牛滝山 10分間休憩	13.10 出発
10.25 カシ平 10分間休憩	13.55 ビワ高原 10分間休憩
10.50 三差路	14.35 塔原
頂上まで途中10分間休憩2回	14.52 バス発車

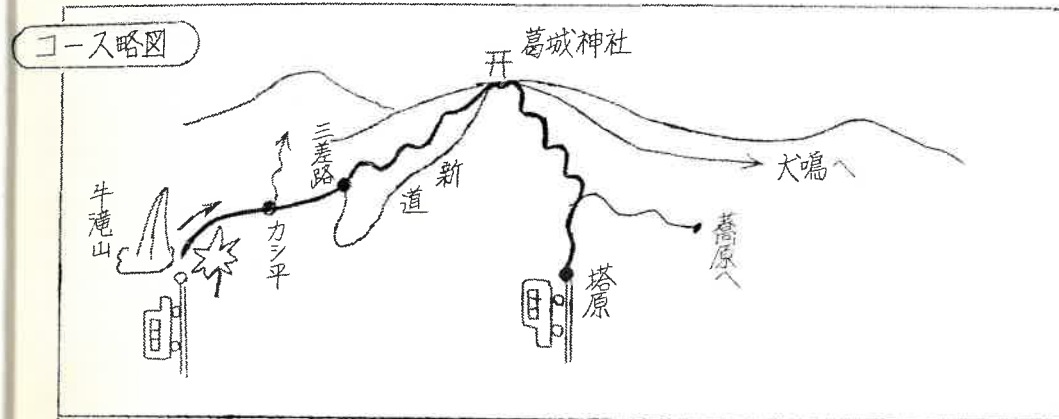
記 事

歩こう会が出来てから毎年登っているので、今回が7回目である。時期、コースともまず同じということで、体力の確認にもなる。

今日はよく晴れて、山頂からは三國山、紀の川方面と展望がよくきく。気温も程よく休憩時間がまたたくまに過ぎる。

例によって長束さんの詩吟を楽しんで下山。塔原への下りはビワ高原の手前で新設中の林道をしばらく歩くこととなり、ここもだんだん変りつつある。来年はどうなっていることか。塔原からのバスは貸切同様であった。

参加者 大北、阪森、十和、松本、佐竹、金田、安浪、加治、内田、中西、永田、興(源)、坂、瀬川、高島、長野、村上、八野、八野(綾)、古林、久保、中野、清水、高垣、長束、山本(光)、諸節、外2名



(諸節記)

第113回例会 昭和59年10月28日(日)

天候・気温 晴時々曇 23.8°

- ◎ 行先 滝の池 — 稲倉池 約9km
- ◎ 参加人員 30名
- ◎ コース 東岸和田発 — 長滝 — 茅渚の宮址 — 滝の池 —
— 稲倉池 — 日根神社 — 泉佐野 岸和田へ

○ 行程記録

- | | |
|-------------------|-------------------|
| 8.00 東岸和田駅発 | 泉佐野ゴルフ場経由 |
| 8.15 長滝駅 | 11.30 稲倉池 昼食 |
| 8.40 茅渚の宮址 20分間休憩 | 13.10 出発 |
| 9.20 意賀見神社 10分間休憩 | 13.45 日根神社 20分間休憩 |
| 10.15 滝の池 10分間休憩 | 14.10 神社前 バスで帰途へ |

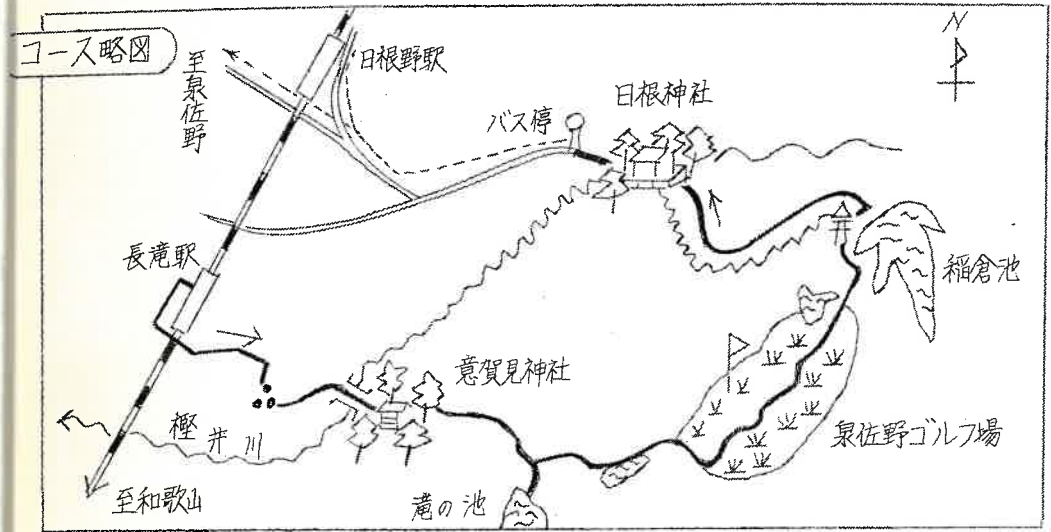
記 事

阪和長滝駅に勢揃い、まずは茅渚の宮址を目指す。この上の郷一帯は古い歴史の土地柄で、鄙びた中に落ち着いた雰囲気と漂わせ、家々の石組の土塀が印象的である。宮址・百坪余りの小公園、市の立札と衣通姫の有名な歌の碑がある。諸節氏よう解説をうける。併せて新参加一回生・横山作次郎氏を紹介。

老杉の意賀見神社、黄葉の滝の池を経て佐野ゴルフ場縦断。ゴルフ場も日曜とあって満員の盛況。11時30分稲倉池到着、小高い小祠に上り昼食。ここでちょっとした打合せ、次回自然歩道概況報告、警笛の使い方ETC。長束氏の吟詠を聞く。

日根野神社は和泉五社の一つ、立派な社である。ここで北沢さんの詩吟を聞かせて貰って、それぞれ泉佐野、日根野へと帰路についた。

参加者 阪森、藤原、横山、佐竹、加地夫妻、金田、安浪、中西、瀬川、田内、村上、八野夫妻、古江、小国、古林、久保、中野、木下、清水、高垣、信田夫妻、矢野、山本、北沢、坂根、長束、諸節



(中西記)

衣通姫の歌碑

允恭天皇は皇后の御妹衣通姫を召したが、皇后と憚って茅渚の宮を造りここに居らしめ、しばしば日根野に遊獵しに行幸されたといわれている。衣通姫が淋しい思いを秘め、その日を送ったのがこの宮址。

「とこしえに君にあえなむ-----」の悲恋の歌碑が立っている。

例会外 東海自然歩道シリーズ第3回 昭和59年11月17日(土)
 天候・気温 曇時々晴 15.6°

- ◎ 行先 摂津峡 — ポンポン山 — 善峰寺 約15km
- ◎ 参加人員 16名
- ◎ コース 岸和田 — 国鉄高槻 — 神峰山寺 — 本山寺 —
 — ポンポン山 — 善峰寺 バス 阪急東向日町駅 — 岸和田

○ 行程記録

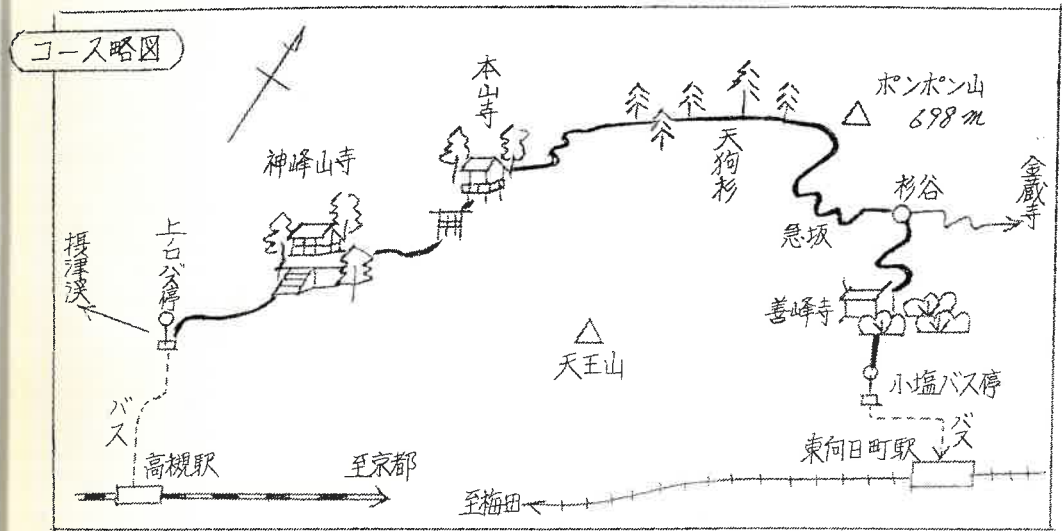
- | | |
|--------------------------|------------------------|
| 7.13 岸和田駅発 | 12.30 本山寺出発 |
| 8.35 国鉄高槻着(上ノ口行)
バス乗車 | 13.45 ポンポン山 15分間休憩 |
| 9.10 上ノ口バス停着 | 15.25 善峰寺 45分間休憩, 参拝 |
| 9.50 神峰山寺着 | 16.40 小塩 バス17.03発 |
| 11.30 本山寺着 | 17.30 阪急東向日町 岸和田19.30着 |

記 事

総員16名、前回の到達点上の口定刻出発。神峰山寺は天台宗末寺、実に閑静なたたずまいで、石段を上ると紅葉とカリンに包まれた本堂は何とも美しい。これより広い林道の坂が続く。本山寺着、俗界を離れたこの奥の院で昼食をとる。ここからポンポン山までは薄日の射す雑木林を縫い、尾根長いの道を行く。サフサフと厚い落葉を踏みしめながら歩むなつかしさは、山歩きをするものの特権であろう。ポンポン山 698m、北に大原野、巻の坂から丹波の山なみを望む。小休止。ここより七曲りの急坂を下る。全員志気旺盛、杉谷部落より善峰寺に至り、名高い遊亀の松を背景に写真を撮る。

帰路は小塩よりバス、阪急で梅田経由岸和田へ、帰着19時30分。

- 参加者 松本、佐竹、金田、安浪、内田、中西、高島、村上、八野(綾)、古林、中野、水谷、清水、山本、長束、諸節



(中西記)

補遺: 小塩バス停の阪急東向日町行バスは17時50分より17時03分まで昼間バスはなし。
 善峰寺にはタクシーが多く利用されている模様。

第114回例会 昭和59年11月25日(日)
 天候・気温 曇/晴 14°

- ◎ 行先 飯盛山 11km
- ◎ 参加人員 31名
- ◎ コース 岸和田駅——淡輪駅——西国寺——信浄院——
 飯盛山——大曲山——岬公園駅

○ 行程記録

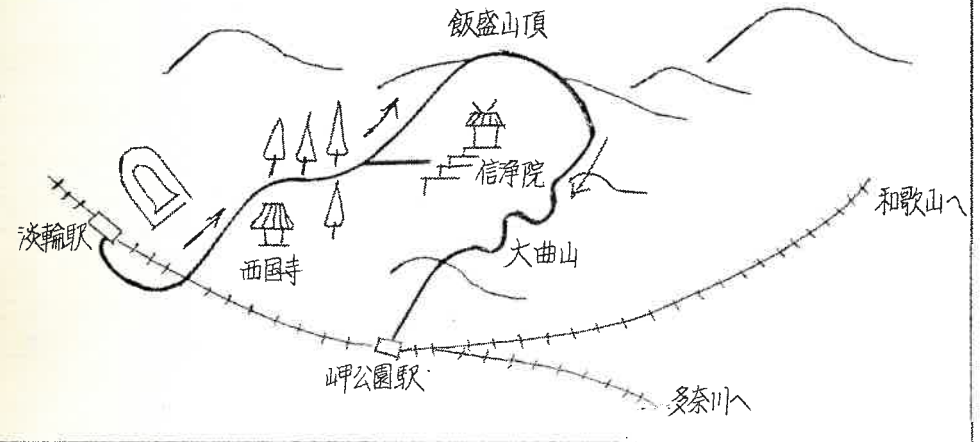
8.16 岸和田駅	70.35 信浄院 10分間休憩
8.55 淡輪駅出発	11.00 飯盛山頂 15分間休憩
9.01 宇度墓	11.45 大曲山 昼食
9.35 西国寺 10分間休憩	13.20 大曲山中復
10.10 飯盛山中復 6分間休憩	14.40 岬公園駅 到着解散

記 事

淡輪駅を出発した総勢31名、肌寒い曇天の下、ゆっくり飯盛山に向かう。眼前に横たわる泉州の山並は見馴れている故もあるが何となく柔和な相である。飯盛山は標高385m、さしたる急坂もなく秋の山道は心地よい。途中体調不全のため1名Uターン帰路につく。30名の隊列にしては先頭との差が少々ひらき過ぎの感がある。冷たい風の山頂をさげ大曲山の中途にて昼食。この山は名の如く左右にくねくねと曲り、その上に上・下にも曲る実態のつかみにくい山である。予定よりやや早く岬公園駅に着いた。印象に残ったことは、落葉ジュータンの山道、飯盛山頂からの雄大な大阪湾の眺望のすばらしさであった。

参加者 加地(未)、阪森、十和、藤原、田良原、佐竹、金田、加地(行)、内田、中西、奥(源)、高島、村上、八野(綾)、八野(昇)、古江、古林、大居、中野、水谷(-)、米澤、清水、高垣、矢野、北沢、太地、長束、山本(光)、奥(芳)、諸節、川崎

コース略図



(金田記)

第116回例会(納会) 昭和59年12月23日(日)
 天候・気温 曇にわか雪 7°

◎ 行先 松尾寺 9km

◎ 参加人員 45名

◎ コース 岸和田駅前 バス 福田 —— 菅原神社 —— 春木町 ——
 —— 松尾寺 —— 稲葉バス停 バス 岸和田駅前

○ 行程記録

8.35 岸和田駅前	14.30 松尾寺発
8.55 福田 15分間休憩	15.15 稲葉バス停
10.15 菅原神社	15.30 " 発
11.20 松尾寺	16.10 岸和田駅前

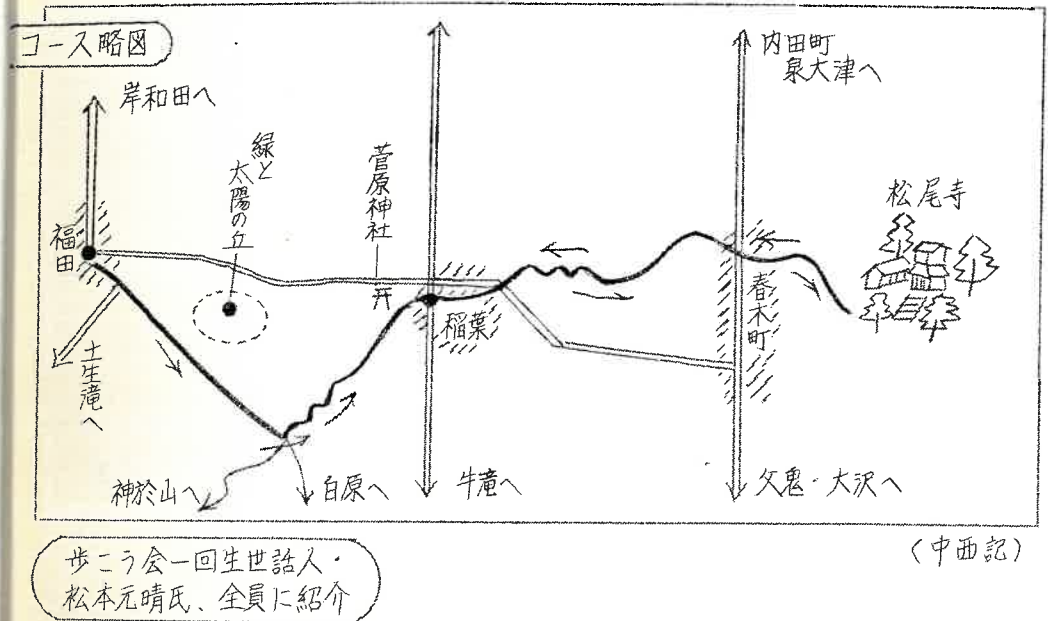
記事

大宮、下松と各バス停で乗り込んで来るのは全部我等の仲間、正に歩こう会貸切りバスである。福田で点呼、参加者45名。ここから設営隊は別路を先発、本隊は福田を抜けて神於山登山口を左へ、薄日射す尾根を伝う。海を隔てて望む六甲は低い白雲にすっぽり包まれている。雪か。

稲葉よりまた山道に入ったあたりで俄然霰はじき飛ぶ、爽快。ちょっと味わえぬ風流、一同盛り。11時20分、松尾寺到着。本日は納会とあって全員で乾杯、名物釜めしに舌鼓を打つ。ほとんど華やいた女性群の歌と踊りが始まり笑いが湧く。吟詠、ダンス、また歌と楽しい一時に興ずる。

14時30分再点呼出発。春木町を抜け稲葉バス停にて解散。

参加者 赤塚、大北、川崎、坂森、十和、松本、藤原、田良原、佐竹、金田、柏村、加地、内田、北口、中西、奥(源)、坂、坂部、高島、村上、八野(綾)、八野(昇)、小国、古江、水谷(静)、大居、久保、中野、水谷(-)、米沢、木下、清水、信田、矢野、山本(覚)、北沢、坂根、大地、長東、山本(光)、山本(松)、奥(芳)、寺田、吉田(環)、外1名



歩こう会一回生世話人・松本元晴氏、全員に紹介

(中西記)

第117回例会 昭和60年1月13日(日)
 天候: 気温 曇時々晴 6°

- ◎ 行先 神社参拜 9km
- ◎ 参加人員 48名
- ◎ コース 福祉センター — 極楽寺 — 流木たか橋 — 貝塚山荘下 — 意賀美神社 — 北坂八幡 — 土生滝バス停

○ 行程記録

8.35 福祉センター出発	11.45 北坂八幡
9.20 極楽寺 10分間休憩	12.15 土生滝バス停
9.40 流木たか橋	12.17 発車
10.30 貝塚山荘下 10分間休憩 写真撮影	
11.20 意賀美神社 15分間休憩 小集会	

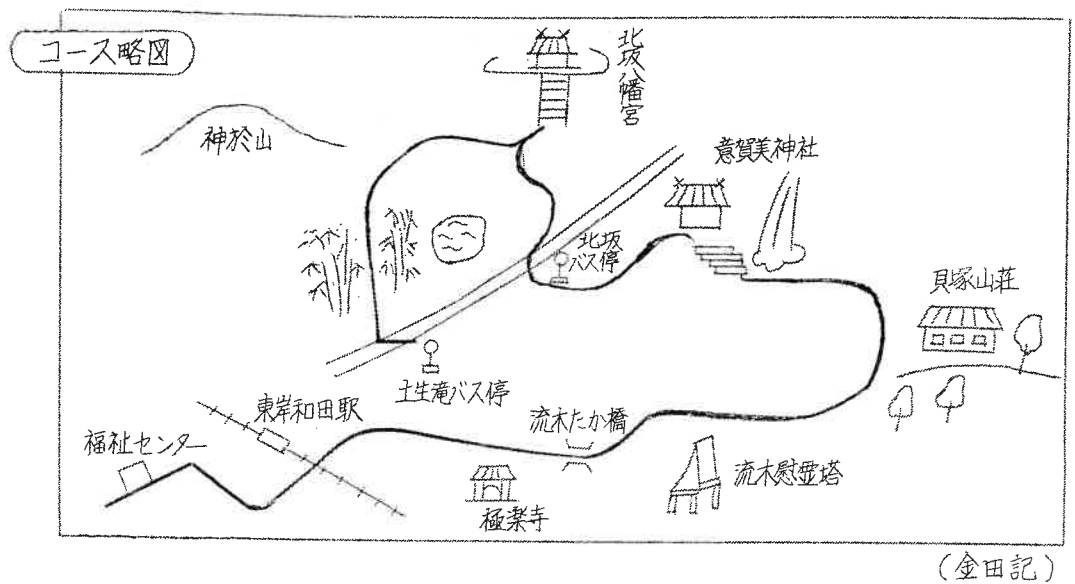
記 事

今年初の歩こう会「神社参拜」は寒さ、天気に関係なく44名の多教で、福祉センターを定刻より5分おくらせて出発した。これだけの参会を得たのは珍しいことで、今年は正月から縁起がいい。入教が多いと人名確認、信号横断と予想外に時間がかかる。お蔭で流木たか橋到着(予定9.20)がおくれ、ここで合流の4名の方に要らぬ心配をお掛けした。

貝塚山荘下で記念撮影、山荘へ立寄る時間を惜しんで意賀美神社へ延々と隊列は150mもつづく。意賀美神社参拝後小集会。いよいよ本日の難所北坂八幡へ。百の階段を登ると眺めは抜群。帰途藤崎さんご好意のミカン狩りを行い、解散地土生滝バス停に着いたのは、予定を大幅におくれた12時15分であった。

参加者

赤塚、大北、加地(球)、川崎、阪森、松本、藤原、田良原、佐竹、金田、安浪、柏村、加地(行)、内田、北口、中西、奥(康)、坂、角野、高島、田内、水谷(隆)、村上、八野(綾)、八野(男)、小国、水谷(静)、久保、中野、水谷(-)、米澤、木下、信田、山本(覚)、北沢、坂根、太地、長束、山本(松)、山本(光)、奥(芳)、諸節、外6名



(金田記)

第118回例会 昭和60年1月27日(日)
 天候・気温 晴 -1~10°

- ◎ 行先 鍋山 約10km
- ◎ 参加人員 38名
- ◎ コース センター——虎橋——流木慰壺塔——貝塚山荘——
 ——鍋山——船渡

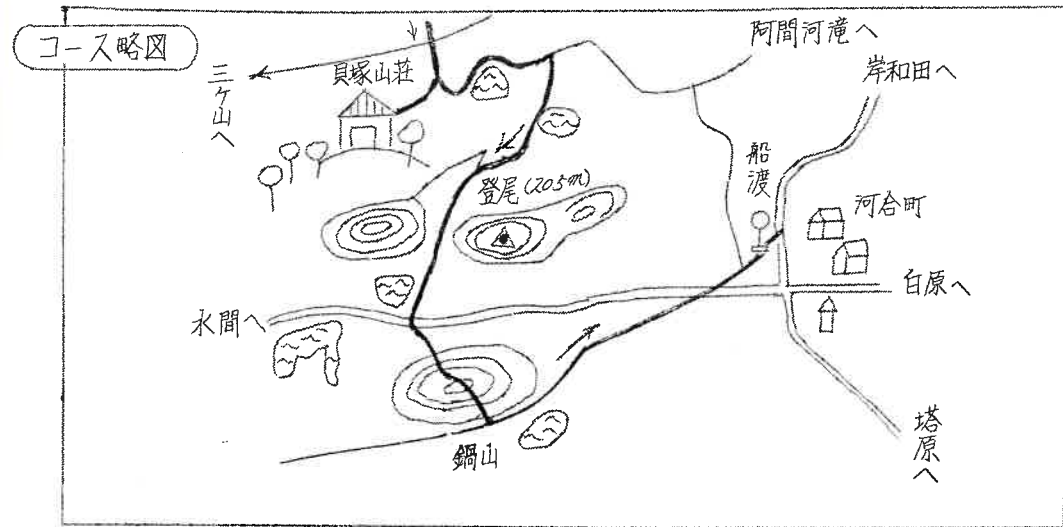
○ 行程記録

- 8.30 センター
- 9.05 虎橋
- 9.30 慰壺塔 10分間休憩
- 10.50 貝塚山荘 20分間休憩
- 11.55 富田林—泉佐野線道路 10分間休憩
- 12.40 船渡 (バス時間39'・9')

記 事

朝霜をふんでの集合であったが、時間と共に気温も上り小春日和の陽気。快適なハイキング日和であった。慰壺塔下から三ヶ山への道を少し歩いて、右側の石材置場を抜けて池の堤に登り池を半周、岸・貝塚境界の林の中を歩く。第115回例会の折の道である。螢山を過ぎ左へ、本道をしばらくで貝塚山荘、ここで休憩。出発前記念の写真。予定した登尾への直登を避け、迂回して楽な道を選ぶ。富田林—泉佐野線の道路にでて、休憩後すぐ前の鍋山に登り、景色を楽しんだ後、竹林を走るように下り、船渡バス停へ。

参加者 赤塚、大北、加地(未)、阪森、十和、藤原、田良原、金田、安浪、
 加地、内田、北口、中西、奥(源)、坂部、角野、村上、八野、八野(綾)、
 森、小国、水谷(静)、久保、中野、米沢、清水、信田、矢野、北沢、
 坂根、太地、長東、諸節、吉田、外4名



(諸節記)

第119回例会 昭和60年2月10日(日)
 天候・気温 曇後晴 13.3°
 9.5°

- ◎ 行先 岸和田 積川神社 8km
- ◎ 参加人員 37名
- ◎ コース 福祉センター —— 泉光寺 —— 福田 —— 積川神社

○ 行程記録

- 8.30 福祉センター出発
- 9.15 泉光寺 10分間休憩
葛城町、福田通過
- 10.20 留塚橋 15分間休憩
- 11.15 積川神社 ----- 11.35 解散

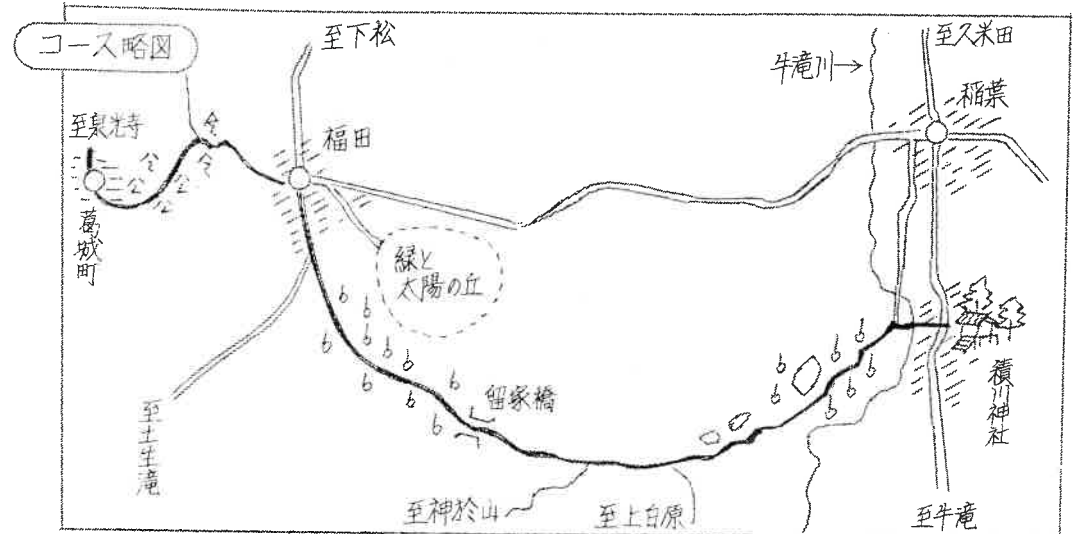
記 事

前日来の雨、いい具合にあがる。泉光寺の裏を回り葛城町を通過、この町は台地に在って緑多い住宅地、整ったたたずまいである。

福田の集落の間道を抜け、留塚橋で小憩。神於山登山口の峠を越え、上白原への道に入る。内畑、積川、稲葉は一望の内に在る。

左折して泉州高校を右に見て、牛滝川の谷に沿う稜線を往く。雨上りの雑木林、池、巒柑山交錯し甚だよい眺めである。積川神社着 11時15分。檜皮葺本殿は国宝。参拝、吟詠を聞き解散。

参加者 赤塚、大北、加地(未)、川崎、阪森、十和、藤原、金田、安浪、柏村、加地(行)、内田、北口、中西、奥、角野、高島、田内、出水、水谷、八野(綾)、八野(昇)、中野、米沢、木下、清水、信田、山本(寛)、北沢、坂根、太地、長束、諸節、外4名



(中西記)

健 步 証

昭和60年2月10日(第119回例会)の時点における該当者

Km	氏 名	初参加例会	達成例会
1,100	諸 節 光 吉	第1回	第110回
1,000	山 本 光 男	第1回	第115回
900	奥 芳太郎	第1回	第117回
"	北 沢 玄次郎	"	第119回
800	尾 崎 秀 男	第1回	第109回
"	久 保 禮 子	第36回	第113回
"	太 地 総	第1回	第116回
700	山 本 松 子	第1回	第88回
"	坂 根 善 七	"	第100回
"	木 下 二三郎	第24回	第116回
"	長 束 正 安	第1回	第119回
600	鈴 木 喜 七	第1回	第79回
"	高 垣 一 夫	第20回	第107回
"	清 水 信 代	第19回	第108回
"	中 野 伊之助	第37回	第109回
"	信 田 育久子	第21回	第115回
"	水 谷 一 男	第36回	第116回
"	山 本 覚	第34回	第119回

Km	氏 名	初参加例会	達成例会
500	乃 村 新之丞	第1回	第102回
"	吉 田 環	"	第108回
"	小 国 美千代	第55回	第117回
300	大 場 辰 一	第1回	第37回
"	広 滝 一七三	"	第58回
"	石 原 ゆ り	"	第59回
"	神 於 清	"	第63回
"	米 沢 安一郎	第37回	第86回
"	古 江 年太郎	第56回	第95回
"	古 林 藤一郎	第55回	第96回
"	八 野 綾 子	第75回	第102回
"	奥 源次郎	第76回	第110回
"	八 野 昇 一	第75回	第112回
"	水 谷 静 子	第55回	第118回
"	金 田 定 之	第89回	"

記録集計

年度別・回数・人員・キロ数 (番外は除く)

年	回数	人員		キロ数	
		延	平均	延	平均
53	7	149人	21.3人	59キロ	8.4キロ
54	20	457	22.8	190	9.5
55	18	419	23.3	185.5	10.3
56	19	489	25.7	199	10.5
57	19	593	31.2	198	10.4
58	18	557	30.9	186	10.3
59	15	482	32.1	159	10.6
合計	116	3,146	27.1	1,176.5	10.1

53年を省き1年平均18.1回

出席人員 最高 48名 第75回
最低 9名 第7回

歩行キロ数 最高 19キロ 第109回
最低 6キロ 第1回, 第7回, 第13回, 第27回

行先回数 神於山 10回 緑と太陽の丘 9回
水間寺 8回 葛城山 7回
松尾寺 5回

会員有志〈随想〉

- 角野春子 初参加
- 久保禮子 「歩くこと」と私
- 中西信雄 暗り峠
- 永田常次郎 ホモ・ルーデンス
- 古林藤一郎 歩こう会はすばらしい
- 森 富香 女一人旅
- 諸節光吉 十年一日
- 八野昇一 歩きの斜視
- 山本松子 ぼたん雪を被って松尾寺へ
- 山本光男 1,000キロを踏破して

〈掲載・50音順〉

初 参 加

(3回生) 角 野 春 子

1月3日、歩こう会に初参加の日である。

小学生の遠足のように、朝3時に目がさめ、その後どうしてもねむれない。いよいよ8時30分センターを出発。「歩き通せるかな」という不安で重い足を、話し声に励まされてどうにかついて歩く。第一の小休所では全身汗だく、初参加の私には衣類調節がわかりにくくセーター1枚をぬぐ。

久しぶりに野道、山道、田のあぜ等歩いて、子供の頃れんげやつくしをつんだ当時を思い出し、懐しさでいっぱいであった。どこをどう歩いたかは、よく記憶にないが、野原の空気をいっぱい吸い、心配していた坂道、階段も、無事歩き通した時の嬉しさは格別であった。

しかしそれにもまして、私の心に深く残ったのは、歩こう会の先輩の方や友人の、初参加の者に対する心づかいであった。有難く嬉しく、感謝の気持ちでいっぱいである。私は健康を損わない限り、歩こう会からはなれられないだろうと思っている。

「歩 く こ と」と私

久 保 禮 子

生後7カ月で患った臀部の腫瘍の後遺症のため、1年6カ月でようやく歩き初めたその日、兄の一声で両親の苦悩の第一歩が始まったのでした。思いもよらぬ「びっこ」の歩きかただったからです。

それから各病院を回った結果は絶望的なものばかりだったと、後年父から聞かされましたが、私の記憶に残っているのは、たしか、4歳ごろでしょうか、夕食のあと、父の膝に足をなげだし、左足をマッサージしてもら

い、右足も少しだけマッサージをして終わるのが日課で、それが小学校4年生ぐらいまで続きました。

父は私に対しては心の底で「障害にあわせた」という責めもあったのか、私の我慢は、たいていの事は通してくれました。特に瑞宝章授与式参列のため上京した時、土産に買ってくれた、ベルベツチンの刺しゅうの入った肩掛け鞆が私のお気に入りでした。多分足の悪い私に少しでも「負担にならないよう」との心づかいが、この鞆にこめられていたからです。

小学校へ入ってからも、担任の名を憶えているくらいで病弱欠席が多く、運動会に参加したこともなく、ようやく4年生になって、姉が私のクラス担任という恵まれた条件もあって奈良へ修学旅行に行き、足の痛さも忘れ皆と行動する楽しさを知った最初でした。

就職して初めて友とハイキングに行ったのが心の支えとなり、長距離を歩くと「びっこ」をひいても苦にならなくなり、父の償いの心を少しでも傷つけない私の願いもあって、患部のレントゲン撮影をする気になれなかったのもこの頃でした。

40歳になって「憩の山岳会(高齢者向)」の発足を知り参加し、A級ならぬCDクラスで、足の老化を防ごうと心身をきたえ、また休日は一人で山へ入ったこともありました。どんなに疲れていても、歩くために服装をととのえると、気持ちまでスッキリしたものでした。

現在も「歩こう会」で、体力ならぬ脚力に合ったコースに参加していますが、時には、なだめ、すかしつつ仲よくつき合える日が、あと幾日あるかと懸念しているこのごろです。

暗り峠

中西 信雄

この峠は、大阪と奈良を結ぶ暗越奈良街道の中間、生駒山の南の鞍部を越す所にあります。

古くは竜田道と共に難波への最短の道筋として重きをなした官道であったようで、松尾芭蕉が最後の旅となった所としても有名です。芭蕉は門弟と共にその年の重陽の節供にこの峠を越えました。

菊の香に くらがり登る節句かな
の名句を残しています。

さて我等歩こう会の健児29名は、9月23日快晴のこの日、奈良の方から枚岡に向けて暗り峠を越えました。

生駒山系に向うこの道筋に入るとさすがに古い街道の面影を残して、重厚な切妻の白壁の家々が秋陽をうけ、道沿いの段々畑の陸稲の穂りとその畦の真赤な彼岸花のコントラストが何とも美しい。また山道に掛ると山なす葛が道まで大きく伸びて、葉間の紫の花からは例のフワンターののような香りがこちらまで匂ってくるようです。

往くこと2時間、暗り峠に辿りつきます。この峠は小さな台地になっていて、西は山峡を通して河内平野が望めます。東端は国境であったので、昔はその端の一軒ずつは河内の国と大和西畑村とに分れていたと言われています。

この道は又、初瀬、伊勢参宮道としても往来多く、峠には明治の中頃までは掛茶屋や旅舎があって、往く人の旅情を慰めていたようで、関西線の敷設と共に急速に寂れて、今は僅かに峠のお地蔵さんと宿屋だったらしい農家が四、五軒残っているばかりです。

然し考えてみると、この峠もそんなに遠くない祖父の代、或いは父の時

代にも、まだ信貴の月詣りや、河内通いの木綿買いの商人などが行きかい、この峠を越えていたと思われ、そんなことを想っていると急にこの寂れた峠が身近なものに思え親しみを感じます。

峠を少し西に下ると、右手に見落しそうな小径があってその角に、

“右くらがり峠 左はほととぎすの名所 髪切山慈光寺”

と彫った道標がありますが、これらの道標や碑、それにぎっしり敷詰められた峠の石畳がその頃の繁栄を偲ばせて大変印象的でした。

歌作二句

天高し 暗り峠 くらからず
先着の 早や休みおり 赤まんま

ホモ・ルーデンス

—— 遊びの哲学 ——

永田 常次郎

「中世の秋」の著者、オランダの史家ホイジンガは、ホモ・ルーデンスという思想を提唱したことで、現代文明の行きづまりを予言した者として忘れ難い人物である。

古代ギリシャの哲人プラトンによれば、「人間は神の遊戯の道具として作られている。だから人びとは、もっと美しい遊戯を遊戯しながら生きるべきである。祭の儀式をするときも、歌い踊るときも、遊戯しながら生きてゆくことが必要である。そうすれば人間は神々の御心を和らげ着めて、恩寵をうけ、敵を防ぎ、^{たか}闘って勝つことができるのである」と。

遊びの目的は行為そのもののなかにある。スポーツ、演劇、演奏など遊戯は、まじめさ（本気）と対立する。「山登り」もまた、そこに山があるから登るので、歩くことに目的はないことは、「歩こう会」の人達はよく

知っている。金銭、名声など卑俗な欲望から自由になったわれわれが、この目的のない山登りというスポーツに、汗を流す姿は、何とすばらしいことではないか。先哲のいうごとく、それが神の恩寵を受けるにふさわしく、また、健かな長寿を約束されるならば、なおさら幸ではないか。

「歩こう会」は健老のクラブの中で最も古く、かつ、いつも生々としたクラブであることを願いたい。

歩こう会はすばらしい

(4回生) 古 林 藤 一 郎

健老大学に入学してから4年、来る3月には卒業、早いものだ。大学院に進む積りだ。いろいろクラブはあるが、自分の一番好きなのは歩こう会。こんな楽しいクラブを考えてくれた先輩に厚くお礼が言いたい。

春夏秋冬いろいろな変化をよく調査された山道。うす緑の春、青葉の夏、紅葉の秋、落葉の冬、また小鳥の声、どう考えても楽しい。一汗かいての昼食、どこの何よりもうまい。始めての人との話し合い、山の上から眺めた海、思い出はつきない。

こう考えてくると、指導者の諸節さんの顔から光がさして来る。要所要所では説明をして貰い、自分達の近くにこんな所があったのかと、今更ながら自分の不勉強、物知らずに驚く。

この年になっていろいろと健康について考えるが、歩くことは一番の健康法と思う。体をきたえながら、いろいろな所へ連れて行って貰い、知識を得、こんな有難いことはない。また、行先もよく調査して、我々の体によく合った所を選んでくれ、このような有難いことはない。

今後共ますます歩こう会の発展をお祈り致します。健老大学の一番の魅力は歩こう会と思う。

女 一 人 旅

(3回生) 森 富 香

放っておけば、そのまま死んでゆくもろもろ。或る日、摘み取り、殺し、料理して-----美味しいものに生まれ変わったと言われればようやく救われる思いです。

大分 由布院温泉 湯の岳庵主

これは10年程前、ひよんな縁で泊った宿のメニューの冒頭の挨拶文です。

九州横断道路・長者原を出たバスは、軽やかに高原を走る。山下、小田の池を右下に見、水分峠^{みずわけ}を過ぎると、山の姿も優しい由布岳の麓、由布院温泉に着いた。田んぼの中にぽつんと亀の井別荘湯の岳庵はあった。広い敷地の林の蔭に、あちこち民家風の客室が見え、空の見える傘風呂、山の香のする草風呂、大きな黒い草屋根の食事処の庵。

私は、昔庄屋の家であったという建物に招じられ居間に上がった。先ず、一服お薄が出され、三郎の間に案内された。天井板はなく黒光りする棟木、桁や梁は丸見えである。全てが磨き込まれ底光りしている。遠い昔に引き戻された思いであった。

食事は食事処でどうぞということで、下駄をつっかけ外に出る。中は柵目に区切られ、赤い敷物が鮮やかである。緋の小さな座布団、紺の緋の着物に前掛姿の給仕さん。出された料理は何といったか思い出せないが、大自然の中に息づく生物を大事にして、最後までその物の使命を全うさせる手助けをする、暖い庵主の心の味は忘れない。

今でも語りかけるかのように、

ありがとうございました。食べてしまえばそれまでのこと、たあいもない思い出が、少しでも残ったとすれば、たしかに姪しいご縁です。

湯の岳庵主

今一度、この庵をたずねたいと思っています。

十年一日

諸節光吉

夏のある日の朝日新聞に「歩いたぞ東下り五十三次」の見出しで京都—東京間をノ5日で歩き通した大学生三人のことが紹介されていた。その中の一人S君が以前通っていた予備校の先生に「大学に入ったらとにかく歩いて下さい、歩き続けて下さい。歩けば何かが見えてきます」といわれたその言葉を忘れませんという談話もあわせて。

ところで私は以前よく風邪をひいた。勤めていた頃のことである。その日はどうにも気分が悪く休んで寝ていた。広くない家のこと、朝食中の学校行きの子供達三人の声が聞こえてきた。一番下の中三の次男が「お父ちゃん寝てら。しんどいかして……」後は皆でぼそぼそと。

私はこれはいかんと思った。翌日は無理をして出かけた。大したことではないかもしれないが、このことは私に、子供は見ている、という思いを強くした。勤めを退めた時、前から決めていたことだが、もう右へ習えはご免だ。これからは元気で楽しく生きるんだ、そして長生きするんだと、然し子供達はまだ独立していない。私は毎朝出社と同じように家を出ることにした。ある意味では勤めていた時より真剣であった。そして歩いた、歩き続けた。この3月で丁度ノ0年になる。

季節、天候に関係なく、流木のお墓と、海岸沿いを交代で、クキロと海岸沿いは約6キロと見ている。予備校の先生は何かが見えるといったが、私にはまだ何も見えない。だが朝、顔を洗ったら直ぐ出かける。このことは身につけてしまった。

歩くことは前向きであって何故かやりたいことが湧いてくる。私にとっ

歩くことは活力源といえる。今朝は海岸沿いを歩いた。明日は流木を歩く。

昭60・2・4

歩きの斜視

八野昇一

2月22日の志賀高原は零下ノ0度の寒さで、おまけに吹雪まじの悪天候！赤黒く雪やけしたリフトの番人が、私の胸につけた優待乗車券と顔を見くらべながら、「おいつつですか。お元気ですね、どこからこられたのか」としきりに身もと調べをしようとする。ひとまわり以上も若い大阪のスキー指導員にせがまれて、スキーの個人指導と聞こえはよいが、私にとっては浮世離れて楽しむというのだから正に天の声というべきだ。

一般の方々には、まことになじみの薄い話で恐縮だが、スキーは両脚をピタッと揃え、一本の脚のようにして滑るのは最高の技術と長い間考えられ、そのためスキーヤーはどれだけ苦勞して、わざわざ二本の脚を一本にしたかしのれない。しかし人類の運動の原点は、歩行に始まるということからすれば、これ程不合理なことはないであろう。スキーというスポーツを、あまりにも華麗という立場からにのみとられ過ぎていたからではなからうか。今や全世界のスキー界は、競技スキーであれ基礎スキーであれ、人間の基本的な運動様式である「直立二足歩行」のメカニズムに類似した、主に脚を使う交互運動、交互操作をスキー技術の中軸としたのも当然のことであろう。

この世に生を受けて以来四分の三世紀、全く自然にそして無意識に動かし続けてきた私の右脚と左脚の運動が、今になって偉大な価値を見出し得たのである。

ぼたん雪を被って松尾寺へ

山本松子

ぼたん雪の降る中を松尾寺に行ったのは、去年のノス月ス3日の納会の時であった。

福田あたりから雪がチラチラ降り出したが、山道を稲葉の菅原神社に近づく頃から烈しくなってきた。菅原神社で小休止したが、一時はどうなるだろうかと心配であった。しかし一行は元気よく、雪中行軍しながら、一路松尾寺を目ざして歩いた。

私は山陰の雪国に生れ育った者だから、雪の降ることなど大して苦にはならない。もっと降れ、もっと積れ、あたり一面銀世界になれ!!と言いたい位であった。しかし、もしもそんなに降ったら、帰りが困るだろうと思った。幸い松尾寺に着く頃には、雪は止み良い天気になった。

納会は先年のように、皆が楽しく、唄ったり、踊ったり、それぞれ隠し芸の披露があって、愉快的雰囲気ですごした。

思い出深い歩こう会の納会であった。今年も元気で歩こう会を続けたいと思う。歩こう会の同好の友と。

1985.2.18

1,000キロを踏破して

山本光男

私は、健老大学歩こう会には、当初から、魂を打ち込んでかかっている。「何を指しても出席しなければならぬ」という意気込みであった。

この6年半のあいだには、葬式とか、謡曲関係など、どうにも手の抜けられぬことがあって、昨年末までに、ノノ回中ノノ回欠席している。不本意千万である。

昭和59年ノス月ス3日、松尾寺ゆきの(第ノノ回)納会で、私は、通算ノノス、5キロ歩いている。早く、ノ、000キロに達したいと思っていたが、漸く達成出来て、一先ず満足している。

昭和53年8月から、毎朝5キロほど、愚妻と歩きつづけているから、歩こう会で、6年半もかかって、ノ、000キロ歩いたからといって、驚くに足りないとは思っている。私は、初めから、もう6、7千キロは歩いているだろう。

この歩くということには、卒業ということはない。やめたら、それこそ冥途ゆきの切符をもらったも同然である。

「歩け歩け運動」としては、この歩こう会の時だけでは足りないのだ。この会では、いろいろ史跡探訪をしたり、移り変わりの風物に接したり、仲間との親交をあたためるなど、役立つことが多い。

つとめて参加しなければならぬ。楽しんで歩かねばならぬ。

「歩け歩け生涯運動」としては、もっと徹底して、歩き方の工夫をしなければいけない。「自然の中へ」の第2号に書いておいたように、歩く基本に従い、毎日毎日歩き続けて、健康で、楽しく、生き生きと若返って、長生きをしなければならぬと思っている。

歩くことこそ健康の秘訣!

1985.2.5

昭和60年3月

岸和田健老大学

歩こう会